

校長先生の初恋物語

第21話 恐怖のほらあな



とっくんは、ドッジボールの対決をきっかけにして、足長君とようやく仲良くなりました。足長君は、きざでかっこつけだけど、悪い人じゃなくて、とてもいい人でした。ただ一つ、よしこさんが好きすぎるのが困ったところ。よしこさんが男の子と仲良くしていると、しっとしてしまうのが足長君の欠点です。でも、それが分かったら、足長君はいいところ

がたくさんあって、とっくんはあっという間に足長君が好きになりました。

足長君とよく遊ぶようになりました。特に、土曜日の午後は、とっくん、きんに君、足長君の3人で、こづつみ山公園の森の中に入って、秘密基地をつかって遊んでいました。その日も、UFOがとんでいました。

こづつみ山公園には、ほらあながありました。それは、戦争中に「防空壕(ぼうくうごう)」として使われていたものらしいのですが、今では野良犬(のらいぬ)のすみかになっていました。昔は、町の中を野良犬がうろろしているのも普通でした。こづつみ山の野良犬は、体が大きくて、きょうぼうで、体の小さな1年生はよく追いかけていました。とっくんは5年生だというのに、体が小さかったため、この野良犬によくおいかけられていました。そんな野良犬は、みんなから、ガブと呼ばれていて、こづつみ山公園のほらあなは、「ガブのあじと」と、みんなが呼んでいました。

ガブがいるため、こづつみ山公園にはあまり小学生が近寄りません。でも、足長君、きんに君がいると、2人とも体が大きいため、ガブも近づいてきません。ガブがきらいなとっくんも、2人と一緒なら安心です。その日も、3人は、秘密基地づくりにおちゅうになっていたんです。

そんな時です。変な雰囲気のある子供が、ガブのあじとの中に入



ろうとしていたんです。その子は、とにかくかみの毛がわさわさしていて、男の子なのか、女の子なのかも分からない感じ。マンモス小学校で見たことがない感じ。足長君は、「あの子、どこの子だろう。見たことないなあ。でも、ガブのあじとに入ろうとしている。危ないから、教えてあげよう。」と言って、その子に声をかけました。

「ねえねえ、君。そのどうくつの中には、おそろしい野良犬がいるよ。かまれるから、近づかない方がいいよ。」その子は、その声に、いっしゅん、こっちを向きました。向いたと言っても、足長君を見ているのかは分かりません。その子の前髪は、とても長くて、顔が全く分かりません。

ほらあなに入るのをやめるだろうと思っていたら、その子は迷うことなく、ずんずん中に入っていきではありませんか。きんに君も、とっくんも、あわてました。「やめときな。危ないよ。」

でも、止める声をムシして、どんどん入ってしまいました。3人は青ざめました。「あの子、大丈夫かなあ。」
「ガブにかまれて、けがするんじゃないかなあ。」

心配になって、秘密基地をつくるのをやめて、ほらあなの近くにおそろおそろ近づいていきました。でも、中に入る勇氣はありません。ちょっとはなれて、まっくらいほらあなの方をずっと見ていました。



そのあと、1時間ぐらいたっても、その子も、ガブも、出てきませんでした。

「もしかして・・・、食べられちゃったのかなあ。」
とっくんが、ぼそっとつぶやきました。
つづく

次回予告
どうくつの中で見たもの